

「賜り物の毎日」

「何の功もない私を今日も礼拝に招いて下さり、ありがとうございます」と、お祈りの当番にあ
たると必ず仰る教会員さんがいました。私の母教会である高の原教会の教会員さんです。その時、
まだ洗礼を受けていなかった私は、教会の中だけで通用するキリスト教用語に疎かったものでは
から、「何の功もない」という表現の意味がよく分かりませんでした。全く分からなかったわけでは
ありません。きっと「何の功もない」とは、「何の取柄もない」とか「何の自負すべきところもな
い」とか、多分、そういう意味なのだろうと思って、いつも聞いていました。もう 70 歳を数える
くらいの教会員さんでした。70 年生きて来て、何の取柄もない、自負すべきところもない、とい
うのは、どういうことなんだろうかと。その人の祈りの後に、しっかりと「アーメン」なんて言
いながら、一抹の疑問を持っていたことを思い出します。

辞書を開いてみますと、「功」とは、「てがら」とか「しるし」という意味を持つようです。辞書
に載っているということは、キリスト教だけの用語ではないということですが、でも、教会の外で
は、人の名前以外で日常会話で「功」という言葉を使っている人を見たことはないので、やっぱり、
キリスト教用語の一つとして数えていいんじゃないかと思います。「功」。存外、キリスト教は、珍
しい日本語を保存する役目を担っているのかも知れません。

話を戻します……。いつも「何の功もない私を」と言う教会員さんのお祈りを聞いていて、一
体どんな気持ちで、そう祈っているのだろうと想像しました。「何の功もない」とは、自分には何
の手柄もない、何のしるしもない、いや、何のしるしも残していない、ということでしょうか……。
言い換えるなら、「取るに足らない小さく無意味な存在である」ということです。今までの成功や

功績も忘れて・・・、成功と言うのは、「功」が「成る」と書き、功績と言うのは、「功」を「積む」と書きますが、そういう自覚が全く無いというのは、一体、どんな気持ちなんだろうと、ちょっと気になりました。いやいや、一度くらいは「成功」したこともあっただろうに、一度くらいは「自負」を得たこともあっただろうに、でも、今祈るのは「何の功もない私を」と。

まあ、もちろん、「だって、そう祈るほうが、奥ゆかしくて、素敵でしょ」という、日本人らしい謙虚な考えもあったかも知れません。「こんなに頑張っている私を祝福してください」なんて正直な願いを、そのまま捧げるのではなくて、相応しいと思える謙遜な言葉に熨斗をつけて、綺麗な包装紙に包んだような恭しい願いを捧げる。そんなお祈りの方が「人の耳」には心地良いというものです。・・・これは、ちょっと意地悪な言い方だったかも知れません。でも、私たちは、「謙遜」という美しい美德のもとで、そういう奇麗な祈りを捧げることがあるんじゃないか、と思います。ちなみに、私はあります、そういう祈り。綺麗な願い、綺麗なお祈り。少なくとも、私の中には、そういう謙遜な非の打ち所がない祈りこそ、「格好が良い」という意識が、心のどこかに確かにあることを認めます。本当は褒めて欲しいのに、認めて欲しいのに。でも、祈りの言葉は、「何の功もない私を」という。

ただ、そんなお祈りは、すべて神様には御見通しなわけで。その御見通しの具合、程度、あるいは正確さというのは、私たちが無意識に隠したいと思っている本心にまで鋭く及んでいるに違いない・・・と、私たちは、まあ、諦めるしかありません。私たちが、今まで生きて来た中で、教えられ学習し、身に染みて獲得してきた、あらゆる「建前の極意」は、神様の前にあっては、多分、無意味です。全部、御見通しです。だから、偽ることのできない、ありのままの自分を赦されて生きている今を、感謝し、祈るしかありません。

今日の聖書箇所において、預言者であったヨナは、怒りました。心の底から怒りました。神様に

対して、神様が引き起こされた御業に対して、自分の思い通りにならない現実に対して、「怒りのあまり死にたいくらいです」と。そういう短絡的な表現が、一預言者の口から出ている。そして、それを記録している聖書がある。なんか、良いですね。努めて綺麗な言葉を、美しい願いを、整えられた祈りを、と頑張ってしまう私たちにとって、受け入れがたい現実を前にして、「怒りのあまり死にたいくらいです」と言い放っても、大丈夫なんだと、教えてくれる、そんなヨナ書でもあります。聖書という本は、「人間の正直な姿」を伝えています。聖書は、「人間とはこうあるべきだ」という教えだけでなく、「人間とは、こういうものなのだ」という戒めを語ります。どんなに背伸びをして、気を張って、素晴らしい輝きに手を伸ばしても。「人間とは、こういうものなのだ」と。

私たちが、どれだけ努力をし、我慢をし、耐え忍び、自他共に認める素晴らしい「功」を残したとしても。多分それは、「一夜にして生じ、一夜にして滅びる」「とうごまの木」なのだと思います。いや、もっと正しく言うなら、「一夜にして生じ、一夜にして滅びることもあり得る」、神様の御業である、ということです。少なくとも、「信仰」という神様から与えられた恵みの中で実現する私たちの言葉や行いは、全て神様の御業です。私が頑張ることも、私が我慢することも、私が広げることも、私が繋ぐことも。それらは、全て神様の御業です。

昨日も教会誌編纂委員会がありました。今から 60 年くらい前の週報を読みました。そこには一生懸命な教会の姿がありました。今の私たちと同じくらい一生懸命な教会の姿です。昔の方が頑張っていたなんて、そんなことは分かりません。ただ、昔も昔で頑張っていた。そんな昔の教会員たちの頑張りがあったからこそ。今の私たちが頑張る前に、一生懸命に頑張って敦賀教会を担ってくれた人たちがいたからこそ、今の教会があるのだと思えば・・・。「お前は、自分で労することもなく育てることもなく一夜にして生じ」・・・、という今日の御言葉に、共感できる部分もあるんじゃないでしょうか。まあ、教会は、滅んではいけませんけどね。生じる、という部分では、私

たちは何もしてないということです。

今、ここで私たちが礼拝を捧げているのは、奇跡だと言えます。もし仮に、普通という状態を、確率とか割合とか珍しさとか少なさとか、そういう基準に照らし合わせて判断するのなら、やっぱり私たちは奇跡ですね。普通じゃありません。そして、この普通じゃない、奇跡のような空間と時間を、100年を越えて守り支えてくれた信仰の先達に感謝したいと思います。私たちが信仰の喜びを得るよりも、私たちが奉仕の苦勞を味わうよりも、ずっと前から、敦賀教会のために、神様のために献金をし、献身をし、奉仕してくれた沢山の先達がいました。そのことをしっかりと受け止めて、まずは、「ありがとう」と言わないといけない。確かに、今のキリスト教、今の教会にも、不満や欠点はあるかも知れません。こうしたい、こうありたいという願いは、各人各様あるかと思えます。でも、神様は、その各人各様、色々な願いや祈りを持った全ての人を包み込んで愛してくださいます。私のことも、私の好きなあの人のことも、私の苦手なあの人のことも。神様は、その一人一人を愛しておられます。そして、神様が愛しておられるからこそ、敦賀教会は、今日もここに建っています。

神様の命じられた通り、大きな都ニネベに悔い改めを宣べ伝えた預言者ヨナは、自分の願いに反して、神様が大きな都ニネベを赦されたことに腹を立てました。そのことを大いに怒ったのです。あそこには罪人しかいない、あいつらは滅ぶべきである、という篤い信仰心なのか、強い正義感なのか。いずれにしても、ヨナは、自分が赦せなかったニネベを、広く寛容な御心でお赦しになった神様に対して、死にたいくらいの不平不満を述べたのでした。でも、神様は、こういうわけですね。「あなたは、自分と言う小さな存在を愛し、自分にとって心地良く好都合なとうごまの木を愛し、そして、その小さく儂いものが失われたことを惜しんでいるが。それならば、この大きな世界を生きる、たくさんの人々。あなたと同じように小さく、何の功もない沢山の人々を、私が愛さな

いでいられようか」と。

神様によって生き永らえることを赦された大きな都ニネベ。その赦しは、神様からの賜り物に他なりません。また、ヨナが愛したとうごまの木も、ヨナ自身が神様によって預言者として用いられたことも、神様からの賜り物です。そして、私たちも。神様によって、愛され、導かれ、整えられて、今日もここで祈りを捧げている私たちの過ごす毎日も、これも神様からの賜り物です。自分で創り出し、勝ち得たものでは決してありません。そんな風に、自分のことを、自分の周りのことを考えてみると、ちょっとだけ優しい気持ちになれるかも知れません。「何の功もない私を」と、建前ではなく、素直な気持ちで祈れるかも知れません。今週も、神様からの賜り物を喜んで受け取り、「何の功もない私で何が悪い」くらいの勢いで、心も軽やかに歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も、私たちの働きに拠らず、私たちの功に関わらず、ただあなたの愛と恵みとによって、私たちを、この礼拝へと招いて下さり、心から感謝致します。多くの重荷や悩みを背負い、私たちは1週間を歩んで参りました。自分では、解くこともできず、かと言って、投げ出すことも躊躇われて、今日まで歩んで参りました。この礼拝を通して、あなたからの祝福を豊かに頂き、心も身体も軽くして、新しい1週間へと踏み出すことができますように。どうか、私たち一人ひとりのことを顧みてください。あなたからの賜り物に感謝し、それが十分に与えられることを確信して、安心と信頼をもって生きることができますように。祈りを絶やさず、「ありがとう」の気持ちを忘れない私たちのことを、どうかしっかりと支え導いてください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。